令和6年4月1日発行 ●第56号 ●発行者：山口久夫 ●編集：三輪山真長寺文化財保存会　題字：真長寺前住職　三輪　醇證

# 真長寺文書の概要とその保存・活用

岐阜女子大学　文化創造学部
文化創造学科　講師　辻　公子

## ○真長寺文書とは

真長寺には、国の重要文化財に指定されている「木造釈迦如来坐像」をはじめとして、県や市の指定を受ける仏画など多くの文化財が所蔵されているが、これに加えて、寺の歴史や地域に関わる古文書類が伝来しており、その数は一三〇〇点余となっている。このうち最も古いものは、応永十八年（一四一一）の「比丘尼明倫先達檀那売券」であり、天正七年（一五七九）の「前田玄以真長寺掟書」など二〇数点が『岐阜県史史料編　古代中世一』に掲載されている。これら中世史料が含まれてはいるが、真長寺文書の大部分は慶長期以降明治期のものであり、最も新しいものは昭和二三年（一九四八）の祭文である。

真長寺文書の内容をみると、安堵状・朱印状といった寺領安堵に関するものがあり、朱印状は代々の将軍のうち、三代家光、五代綱吉、九代家重、十一代家斉、十二代家慶、十三代家定、十四代家茂のものが存在する。そして、真言密教の秘法を授ける伝法灌頂に関する加行・作法・願文などがあり、歴代住持とその弟子達が儀式によって授与された印信が数多く残されている。また、江戸時代の真長寺が神光寺（現、関市下有知）とともに、高野山真言宗の中濃地域寺院の触頭を務めていたことにより、本寺である高野山増福院から触下寺院に伝達する通達や、触下寺院から本寺への願書、本寺や同宗寺院との書簡、争論に関するものなどが残されている。触下寺院は、山県郡・武儀郡・加茂郡・可児郡、と広範囲にわたっており、本寺との関係や美濃国内の真宗寺院の様子を窺うことができる貴重な史料である。

収蔵庫内写真

このほか、質入れ証文や借金証文などの寺経営に関するもの、宮上村における争論に関するもの、書簡などがある。土地を集積し地主として小作地を管理する様子や争論の取り扱いをおこなうなど、地域社会や地域における真長寺の存在を知ることができるものである。

## ○真長寺文書の現状

現在真長寺文書は、岐阜女子大学地域文化研究所に寄託されている。その経緯を振り返ると、平成九年（一九九七）に住職の依頼を受けた故松田之利氏（当時岐阜大学教授）の呼びかけにより、名古屋大学から二名、岐阜女子大学から二名が参加し、五名で真長寺に訪れて古文書の状態や内容の調査をおこなった。その結果、地域的にも近く整理作業をおこなう体制があることから、岐阜女子大学地域文化研究所で古文書を預かり、整理・目録の作成を担当することになった。

整理作業は、最初に害虫やカビ菌を処理するために燻蒸をおこない、埃などの汚れを落としてから中性紙の封筒へ入れる。次に包紙や袋などで一括されていた情報がわかるように番号を付け、文書箱に収める。そして古文書の写しを作成するとともに、文書名・差出人・宛所などのデータを取り、内容ごとに分類して整理をするという順序で進めた。そして、平成十二年に『三輪山　真長寺史料目録』を刊行した。

真長寺文書は、学内の収蔵庫に保管し、温湿度の管理をおこない、定期的に古文書の燻蒸を実施してきた。平成十七年（二〇〇五）からは、ＩＰＭ（総合的有害生物管理）の方法を導入し、燻蒸による薬剤処理ではなく、人の目による点検や定期的な清掃など予防を主とする保存方法を実施している。

## ○真長寺文書の保存・活用

真長寺文書の詳細については、『三輪山　真長寺史料目録』のほかに地域文化研究所のホームページでデータベースを公開している。閲覧については事前予約をすることで対応しているが、古文書を保護するため写真版で閲覧に供するものもある。

今後は、デジタル撮影をおこない、デジタルアーカイブ化を進めることによって利便性を高め、資料保存を図ることを計画している。

また、三輪山真長寺文化財保存会から記念事業の一つとして『真長寺古文書読解書』第一～四巻が刊行されている。約三〇〇点の古文書についての翻刻、読み下し、口語訳が記載されているので、こちらも活用されたい。